

第7回日本小児耳鼻咽喉科学会

The 7th Annual Meeting of the Japan Society for Pediatric ORL

会長 西崎 和則 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科学)

Kazunori Nishizaki (Department of Otolaryngology and Head & Neck Surgery, Okayama University Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences)

第7回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会は、平成24年6月21日(木)～22日(金)の2日間にわたり岡山コンベンションセンター(岡山市)において開催されました。梅雨の季節でもあり、天気予報では大会開催中は雨で、6月としては稀なことに台風4号、5号がそれぞれ大会の前日と2日目に岡山に接近するという最悪の予測でした。大会初日は予想通り雨になりましたが、2日目は“晴れの国”岡山という名前に相応しい五月雨(梅雨)の間にみられる晴天という五月晴れになりました。

当日の受付者数は493名で、研修医及び学生は15名と500人を超える参加者を岡山の地に迎えることができました。会長として、この学会の前身の日本小児耳鼻咽喉科学会研究会を2005年に大阪で担当させていただきましたが、岡山で開催できることは望外の喜びでした。今回は学会として7年目で、子供でいえば小学1年生になり、新たな段階を入ります。この時期に学会として担当できましたことを本学会理事長をはじめ役員、会員の先生方に心より感謝申し上げます。

本学会のテーマは、「未来ある子どもたちのために」とさせていただきます。学会ポスターも、明るい未来に向かって歩いていく子どもたちを耳鼻咽喉科医が見守りたいという思いを込めて制作致しました。特別プログラムとして、特別講演を1つ、シンポジウムを2つ、手術手技セミナーを2つ企画しました。また、一般演題は124と多くの申し込みをいただき、2日間2会場で過密な日程になりました。

特別講演は奈良女子大学保健管理センター教授の高橋裕子先生が「未来ある子どもたちをたばこから守るために」というタイトルで美しい和服姿で行われました(写真1)。司会には自治医科大学耳鼻咽喉科教授の

市村恵一顧問に、先生の理事長時代に高橋先生をご推薦いただいた縁でお願いしました。小学生・中学生の喫煙率は最近低下していますが、受動喫煙の問題もあり、まだまだ対策が必要とのことでした。また、海外招聘講演では、台湾よりTaipei Medical UniversityのFei-Peng Lee教授をお招きして、「Congenital aural atresia and stenosis associated with cholesteatoma」というタイトルでご講演いただきました(写真2)。

シンポジウム1は「小児難治症状への対応」という



写真1



写真2

タイトルで、岡山大学小児科教授の森島恒雄先生と国立成育医療研究センター耳鼻咽喉科の守本倫子先生に司会をお願いしました。各分野における難治症状として、耳漏は富士市の上出洋介先生が、鼻閉は獨協医科大学越谷病院の吉村剛先生が、睡眠時無呼吸は新潟大学の相澤直孝先生が、摂食・嚥下障害は鈴鹿市の森正博先生が、咳は岡山医療センター小児科の久保先生がシンポジストを務められました。司会を小児科医である森島先生をお願いした意図通り、小児科医と耳鼻咽喉科医の認識の違いが明らかになり、活発な討論が司会者とシンポジストの間で繰り返されました。特に脳性麻痺児に対する森先生の嚥下障害に対するリハビリの取り組みは、小児科医にとっては非常に新鮮な取り組みであるとの森島先生のお言葉が印象的でした。もちろん耳鼻咽喉科医にとっても斬新な内容で、よりよいQOLを障害児に対して考えていく森先生の真摯な姿勢には感銘を受けました。会場に詰め掛けた満員の先生方に満足のいく内容であったのではないかと思います(写真3)。

シンポジウム2は「発達評価から読み解く難聴児の現状」というタイトルで、札幌医科大学耳鼻咽喉科教授で当学会の理事長の氷見徹夫先生と福岡大学耳鼻咽喉科教授の中川尚志先生に司会を担当していただきました。新生児聴覚スクリーニングがわが国の行政レベルで初めて岡山県において開始されて既に10年が過ぎました。新生児聴覚スクリーニングによる難聴の早期発見・早期療育が難聴児の言語発達に与える影響の評価とともに難聴児の現状と問題点を周知していただくよい機会になったと思います。さらに難聴児の言語発達の評価方法としてALADJIN (Assessment of Language Development for Japanese children) が紹介されました。シンポジウムの最後に司会の氷見先生

が述べられましたが、小児難聴は一般耳鼻咽喉科医から見ると、馴染みの薄い領域です。この学会のテーマは「未来ある子どもたちのために」ですが、難聴児の未来が希望溢れるものとなる世界を願望するシンポジスト、名古屋市立大学の高橋真理子先生、札幌市の新谷朋子先生、秋田県立リハビリテーションの中澤操先生、岡山大学の片岡祐子先生と追加発言の岡山大学病院の藤吉昭江先生との篤い思いが伝わってきました。くしくもシンポジストおよび追加発言者が全員女性で、女性の社会進出を経て、時は今、女性の時代に歴史は動いていることを予感させる意義深い五月(旧暦)のシンポジウムになりました(写真4)。

手術手技セミナーは、宮崎大学耳鼻咽喉科教授の東野哲也先生の司会で「小児の人工内耳困難症例への対処」を岡山大学の福島邦博先生に、川崎医科大学耳鼻咽喉科教授の原田保先生の司会で「乳幼児の呼吸障害に対する対応 — 喉頭軟弱症、睡眠時無呼吸から気管狭窄まで外科的対応を中心に」を兵庫県立こども病院の阪本浩一先生に豊富な動画とともに講演していただきました。その他、モーニングセミナー1つ、ランチョンセミナー4つ(このうち海外演者2人)を行いました。

学会テーマである「未来ある子どもたちのために」に、今学会が小児耳鼻咽喉科医療の発展を通して少しでも貢献できたのではないかと考えております。来年の第8回日本小児耳鼻咽喉科学会は群馬大学小児科教授の荒川浩一先生が会長で、前橋市の前橋テルサで2013年6月20日、21日の両日に開催予定です。研究会から学会になって初めて小児科の会長で開催されますので、従来とかなり違った内容になることが期待されます。日本小児耳鼻咽喉科鼻科学会が、小児科医と耳鼻咽喉科医のさらなる交流の場となることを祈念しております。



写真3



写真4